

「学内外における学生主体の建築活動（教育・研究・実践）」

シンポジオン世話人会

1. はじめに

今回のシンポジオンでは「明日の建築をめざして建築の原点に立ち返る」と題して、北海道地区から1チーム、北陸から3チーム、関東から1チームが参加し、総勢30人で大いに語り合った。ここに、そのときの様子をまとめたので報告する。

2. 主旨説明

学生の皆さんは「日々の日常活動を大切に」と考え、まちづくり、住まいづくり、種々ボランティアなど、旺盛なチャレンジ精神で主体的かつ精力的に活動している。シンポジオンでは、そうした学生諸君の活動について話題提供の場を設け、語り合いと自由討議により参加者全員で交流する。

今回は、北海道大学にて、学生の皆さんおよび職業人の皆さん、大いに知的交流を楽しんだ。



会場風景



3. 開催概要

日時：8月31日（土）14:00-17:00

会場：北海道大学工学部 N207 室

話題提供学生5チーム(大学研究室)、参加者50人

実施タイムテーブル（以降敬称略）

司会学生：野田真士(福井大)

14:00-14:05 趣旨説明と実施要領

14:05-15:40 各チームの発表(30分/チーム、計5チーム)

15:40-16:50 語りあい(自由討議)

16:50-17:00 各チームまとめ、総括

話題提供チーム

■早稲田大学チーム：伊永拓郎、瀧口希望、高橋良爾、馬淵大宇、計4人

【日常の歩行空間に新しい視点を提案する電子書籍】

■新潟大学チーム：荒木裕太、柿崎恵子、岩根祐介、岡本拓郎、米山直樹、片桐知美、南部峻宏、徐、計8人

【市民と大学の協働によるポケットパークづくり-小さな里山づくり-】

■福井大学Aチーム：村田真由、豊田 智也、国枝 賢治、西村知生、川端慎司、計5人

【雑木林という地域資源を活用した学生生活の報告～雑木林を楽しむ会の発足10年目を迎えて～】

■福井大学Bチーム：野田真士、1人

【社会福祉法人「ハスの実の家」（知的障害者施設）における支援紹介】

■北海道大学チーム：気仙誠、1人

【岩見沢、駅と街を結びつけるウォークラリー】

4. 各チームの発表（発表内容から一部抜粋して紹介）

4.1 早稲田大学チーム

【日常の歩行空間に新しい視点を提案する電子書籍】

人の動きに注目し、文字を少なく、絵やひらがなで分かりやすく楽しい電子書籍を目指した提案である。例えば、歩く中にも（すたすた、みんなで、ゆっくり、ひとりで…等）いろいろな「歩く」がある。4つの視点（はやさ・みつど・きせき・たたずむ）で人の動きをみるのが特徴的である。映像が風景に変わるように、同時に音楽も作成されている。人の動きを観察して気づくことができ、また、人の動きを楽しむこともできる。

4.2 新潟大学チーム

【市民と大学の協働によるポケットパークづくり-小さな里山づくり-】

地域と大学の連携として小さな公園（ポケットパーク）づくりを授業の一環で行っている。具体的には、「里山のみどりを街の中へ」をテーマとして、三条市のJR弥彦線高架脇にある11箇所の空地进行を、年1箇所ずつ小さな里山の公園としてつくり、整備していく活動を行っている。ここでは2009年度の活動を紹介された。



4.3 福井大学Aチーム

【雑木林という地域資源を活用した学生活動の報告～雑木林を楽しむ会の発足10年目を迎えて～】

福井大学の南側に市街有数の雑木林がある。広さは約三千平方メートルだが里山にでも迷い込んだような雰囲気を感じる。活動の発端は、雑木林の駐車場化案に学生たちが反対し、地域住民との話し合いが始まった。雑木林を「ざつぼくりん」という愛称で呼称し、地域の人と心地よい場所を作り上げたいと活動している。



4.4 福井大学Bチーム

【社会福祉法人「ハスの実の家」(知的障害者施設)における支援紹介】

福井県には『ハスの実の家』という障害のある方々のための福祉施設がある。ここでは、すべての人が地域社会で自分らしい生活をおくられるように、という理念を持っている。ここに、自分が支援に行っている。全ての人が当たり前で生活できるまちは、のびのびと自分らしく生きられるためには、グループホームでの日々の暮らしの様子や、支援内容を紹介された。



4.5 北海道大学チーム

【岩見沢、駅と街を結びつけるウォークラリー】

発表者はこれまでの活動をフェイスブックにアップしておられた。発表者はそれを皆さんに披露されていたので、まずは会場はびっくりであった。若者らしいプレゼンの新たな方法として喝采を浴びた。具体的には、日本で初めてグッドデザイン賞を受賞した北海道岩見沢駅において、駅と街を結び付けるには魚-cuが一番といって、追う-cu ラリーを市民の皆さんと一戦したことを熱く語っておられた。

5. 語り合い (自由討議)

発表チームごとに島テーブルをつかった。各テーブルで説明担当の代表者を決めて、残りの方々は興味のあるテーブルに行って議論してもらい、全体で自由な語り合いをおこなった。



語り合い風景



6. 閉会の挨拶

シンポジウムの特徴は何かといえば、皆さんが対等な立場で自由にかつとことん語り合うことにあると思います。知的交流のすばらしさが感じられたと思います。こうした場をもっと活用いただきたいものです。(富樫豊)

7. 学生のコメント (後日寄せられた感想)

●私は、このような他大学の活動が知れる機会をもっとつくるべきだと思いました。学生シンポジウム中の討論会でも、各々発表した内容ではなく、お互いの大学が正直になにをやっているのかを質問しあうのがメインになっていました。論文大会を全体を経ての感想にもなりますが、同じ学科内でも他の研究室の動向を知らなかったり、論文を公開していないが為に、既往研究と同じ事をしてしまったり、コミュニティの無さが、僕らの新しい・おもしろい研究の妨げになってしまっていると感じました。報告する成果がなくても参加できるくらい、学生シンポジウムの参加のハードルを下げ、もっとポップに感じる宣伝や広告を作っていくと、年々参加人数も増えて、とても唯意義な催しになると思います。来年も是非参加したいと思っています。今後ともよろしくお祈りします。(早稲田大学・伊永さん)

●他大のプロジェクトを知る機会はいままで無かったので、大変ためになりましたし、刺激になりました。どういった雰囲気のものなのか事前にわかると、気軽に参加しやすいと思います。

ありがとうございました。（早稲田大学・瀧口さん）

●他大学の人と絡めて良かったです。もし話し合う機会を設けるといふ企画なら議題だけ与えて何の準備もする必要がなくなればもっと多くの大学が参加してくれると思いました。（早稲田大学・高橋さん）

●他大学の活動を直に聞く機会は少なく、とても貴重な経験が出来ました。特に、地域のコミュニティに密着して豊かな活動を展開しているグループが多く、自分たちの活動に足りない部分を自覚することができました。今後も学会を通じた対話に積極的に参加し、自分たちの今後の知識と意欲の向上につなげていきたいと思います。（早稲田大学・馬淵さん）

●今回のシンポジオンでは、意見交換の討議が中心ということで、活動しているうえで困っていることを始め、まちづくりの専門的な話等、様々なことについて討議できました。また、自分たちが考えていることに関して、他団体から評価を受けることもでき、自分たちの活動を見直す良い機会にもなりました。また、僕自身は建築が専門ではないので、まちづくりに関して専門的なアドバイスをもらえ、今後の活動に生かせる有意義な時間でした。討議時間が長かったので、ずっと同じグループでは残念な気がしました。せっかくの機会だったので、もっと多くの人と意見交換できると良かったと思います。（福井大学・豊田さん）

●シンポジオンに参加させていただきありがとうございました。北海道まではなかなか遠い道りでありましたが、さまざまな活動をしている学生が集まり自分の活動や相手の活動のことについて話し合いが出来たのでとてもよかったです。こういう機会じゃないとなかなか他大学の学生同士で話し合うことがないので参加できてよかったです。最初は自分と専攻が違う人たちとの話し合いで不安な思いもありましたが、参加している学生は学部4年生以上がほとんどで自分と専攻は違っても発表している姿や自分たちの活動に真剣に話し合う姿をみて、自分も雑木林を楽しむ会の活動だけでなく研究も含めて自分のやっていることに誇りとか自信をもって活動していきたいと思いました。今回はそのような経験や体験が出来るととてもよかったです。改めてお礼を申し上げます。本当にシンポジオンに参加させていただきありがとうございました。（福井大学・国枝さん）

●目的や目標達成のスパンが異なった、様々な活動を知ることが出来ました。それぞれ違って、取り組み方が色々あって、自分の活動の参考になりました。自由討議では聴衆の方の参加もあり、多様な立場からの意見交換ができましたが、会場共通のテーマがあれば良かったと思います。また、発表後に質問タイムなどあれば良かったと思います。（福井大学・村田さん）

●大会のプログラムの中に「学生による語り合いのシンポジオン」とあるのを見つけ、何だか分からないけど面白そうだと思

い、参加してみました。私は設計プロセスの研究をしていますが、その中心的な課題の一つは、規範（あるいは価値観）がいかに生成し、変化するののかということにあります。なぜなら今日、設計にもとめられているのは、所与の問題をいかに解決するかということだけではなく、何を問題として再設定するかであり、この問題設定は、規範に依存しているからです。つまり何を目的とするか、何に価値があるとするかが問われているのです。新しい規範は他者（人であれモノであれ自らの規範から外れるもの）との出会いの中でのみ生まれると考えています（社会学者大澤真幸の理論に依拠しています）。そのような意味で、近年のコミュニティ・デザインやワールド・カフェのようなものに前から関心をもっていました。当日は、研究内容ではなく、私が関わっている村づくりのプロジェクトについて話させてもらいました。同席の方のテーマと関連性が高いと考えたためです。このようなイベントには何度か参加したことがあるのですが、どうしても会話が散漫とし、深みに達することが少ないように思います。今回も、途中参加だったので時間が少なかったこともありますが、私はあまり深い話しはできなかつたと思います。どうしても、互いにその場の他の人たちに遠慮して、当たり障りのない範囲で話してしまう。きっと、ある程度は、無遠慮に信じていることや思ったことを言うことが必要なのではないかと思います。それによって他者の他者性が表面化する。この意味で、このようなイベントにおいては、通常的生活をスムーズに行うためのモードとは異なったモードにシフトすべきであるということが前提として共有されていたほうが良いのかもしれません。つまり、ある程度、空気を読まずに言いたいことを言って良いというモードです。もう一つ考えたのは身体との関わりです。欧米などのワークショップでは、始めに体を使った即興劇のようなものをやったりします。おそらく会話が、思考よりも身体とリンクするときに、一種の共感が生まれます。相手の気持ちについての推論ではなく、直接的な自己と他者の反転です。他者との共感のなかで原初的な規範が生じると考えられます。シンポジオンの原義は、「共に（酒を）飲む」ということだと思いますが、今回、懇親会に行けなかつたのが残念です。酒に酔っても酔わなくても、食事という極めて身体的な事態が共感の場を与えるはずですが。次回は始めから食事しながらにしてみても良いかもしれません。さらに飲みながらにすれば、本物のシンポジオンです。（京都大学・山口さん）

●シンポジオンの本体については、参加していないのでなんとも言えませんがきっと様々な大学、地方、立場の方々がある意義な交流できたのだらうと想像します。あのような機会は、学生でも社会人でもどんな人でも自分の枠を拡張できるチャンスだと思います。開催に至るまでは、いろいろと調整、段取りが難しかったと思います。お疲れ様でした。私も会社の人を通じて、異業種の人と交流する会に参加したり、地域の活動に顔を出したりしています。もし次回や別の機会で、そのような話が求められるのであれば、喜んで参加させていただきます。今後ともよろしく願いいたします。（大和ハウス・本多さん）

8. おわりに

5つの学校チームの方々、精力的な発表、ありがとうございました。また活発な議論、ありがとうございました。今回の貴重な出会いや体験を今後に向けて励みにしていただければと思います。

最後になりましたが、皆さんのがんばりに期待しております。

付録1. 参加者状況

学生：20人

北海道大学2人、札幌市立大学1人、
早稲田大学3人、新潟大学7人、福井大学5人、
弘前大学1人、ほか

職業人：

実務者2人（ハズカ-1人、NPO1人、）

教育研究者10人程

（九州産業大学、早稲田大学、田無工業高校、
青森工業高校、ほか）

付録2. 懇親会

札幌駅北のイタリア食堂スタッツィオーネ

時間：17:30から2時間ほどを予定

大いに盛り上がりました。

参加：20人

（福井大学大学院／野田真土）